

- 三級へ 清水伊勢吉、倉田敬三、中村愛作、本多親宗、増岡次郎
 二級へ 佐野甚之助、田中信藏
 一級へ 柴田一能、諸遊慎吉

四 明治三十三年史

(一) 猛烈稀有の寒稽古

寒稽古は毎年のことであるが、本年の寒稽古は昨年來一時に勃興せる柔道熱の影響を受け、皆勤者の人數と云ひ、稽古の本數と云ひ、柔道部創立以來の事に屬するは無論のこと、後年の盛んなる時にも決して劣らざる活況を呈した。三十日間の道場は恰も鼎の沸くが如く、その力強き興隆氣分は左の表を以つても知られると思ふ。

皆勤者と其本數左の如し。

(有級者)

- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-----------|-----------|
| 一、二三八 柴田 一能 | 一、一〇一 倉田 敬三 | 一、〇三七 吉堀 誠一 | 七〇〇 向山 昌治 | 六四七 吉田 兵藏 |
| 五八九 金澤冬三郎 | 四一三 田邊 貞治 | 三九〇 安部 保平 | 三四九 堀切善兵衛 | 二九五 本多 親宗 |
| 一二八 小寺 源吾 | 二二五 清水伊勢吉 | 一三一 増岡 次郎 | | |

(無級者)

八五五 森本利三郎

八〇三 田鎖藤太郎

七八六 杉浦 壽作

七八六 植村 直木

六八二 盛田 保三

六七一 後藤多喜藏

六五一 木村徳太郎

六二八 西原 久

六一六 麻生 茂

六〇五 越中谷吉次

五八九 黒田 吉治

五八五 小野 秀一

以下四十九名略

合計 七十四名

寒稽古一千本と云へば、兎に角尋常ならざる努力である。又皆勤者七十四名と云へば、最初出席せる者は恐らく百名を超えたるならん。僅に五十二疊の道場に於て、斯る多人數の者が、一定の時間内遲刻早退なくして出席し、寒中に各人等しく汗をかゝんとすれば、稽古の間を短くするも、勢ひ本數を多くするより外仕方なかつたことが察せられるであらう。

右寒稽古皆勤者賞牌及び證書授與式は、茶話會を兼ねて二月十八日午後六時より道場に於て開かれた。倉田幹事開會の辭を述べ、柔道部が今日の隆盛を見るに至つたのは、先輩諸氏の辛苦經營と部員の熱心に基くものにして、尙今後に於ても協力一致して益々盛大に向はんことを希望し、次いで柴田幹事の會計報告あり、夫れより山下師範は濱野部長に代りて名譽ある皆勤者に一々賞牌及び證書を授與して式を終つた。後續いて茶話會を開く。快活なる部員のことゝて互に胸襟を披いて談笑し、三十日間の苦心を手柄顔に意張るもあれば、今更に皆勤せざりしを悔ゆるもあり、時の移るを知らざりしが、漸く十一時に散會した。來會者百二十餘名。

(二) 第九回 柔道大會

第九回柔道大會は、三月二十一日に舉行された。場内の四面には紅白の幕を張り、右方を來賓と體育會幹事及び幼稚舎

部員の席とし、正面は小高くして、外來勇士席及び賞牌授與所を設け、入口の部分は塾生試合者席と一般來觀者席に充てには國旗と塾旗とを交叉して飾り立て、斯く用意萬端整ひたる上、勝負は午前八時半に開始された。晝迄に四十六番組を行ひ、午後一時より成年者投之形（大中氏と田中氏）及び三之形（杉浦氏と本多氏）ありて後、引續き試合に移り、四時十七分過ぎ最後の七十一番組を取り了り、それより講道館之形（山下師範と柴田氏）幼年者投之形（平野氏と向山氏）及び體操之形（平賀、大塚、西原、小野の諸氏其他十二名）あり、何れも非常なる喝采を博して五時散會となつた。

當日の試合番組表を左に掲ぐ。

二本勝負

(○は勝 ×は引分)

(一) ×	河 村 四 郎	(六)	大 野 與 三 松	(一一)	深 作 政 太 郎	(一六) ×	田 中 清 太 郎
(二) ○	田 代 信 一	(七)	小 泉 萬 治	(一二)	宮 入 政 雄	(一七)	鈴 木 荣 一 郎
(三) ×	江 波 源 三 郎	(八)	小 野 秀 一	(一三)	竹 内 駒 太 郎	(一八) ×	江 原 義 行
(四) ○	岩 崎 重 次 郎	(九) ×	松 村 福 太 郎	(一四)	八 木 房 太 郎	(一九)	佐 藤 精 一
(五) ○	今 井 猛 七	○	佐 伯 昌 道	(一五)	吉 田 善 太 郎	○	稻 村 實 章
○	成 澄 義 春	○	小 林 則 造	○	塙 本 和 平	○	松 樹 武 一 郎
○	中 村 小 陶 治	○	佐 伯 英 雄	○	江 波 善 三 郎	○	田 中 勝 輔
○	板 橋 善 兵 衛	○	石 井 德 太 郎	○	森 川 菊 之 助	○	加 藤 多 助
○	青 木 鐵 藏	○	釜 尾	○	秋 山 孝 之 助	○	宇 田 川 邦 次 郎
				○		×	

(二一)	○	小倉丹治	(三〇)×	伊豫田源次郎
(二二)	○	山田又司	(三一)×	久保新太
(二三)	○	北川常四郎	(三二)○	菊地一郎
(二四)	○	森本銀次郎	(三三)○	植村直木
(二五)×	○	大塚莊亮	(三四)×	古川哲二
(二六)	○	堀内貞治	(三五)×	鈴木太郎
(二七)	○	永倉庄次郎	(三六)	西久保治助
(二八)×	○	村瀬末一	(三七)	三木健輔
(二九)	○	福間泉	(三八)	柿沼謹吾
油井宇八	○	小倉和市	(三九)×	香川富太郎
後藤多喜藏	○	茂茂浩	(四〇)○	越中谷吉次
福間泉	○	福間泉	(四一)○	大石喜一
高島一貫	○	高島一貫	(四二)○	越中谷吉次
森本利三郎	○	森本利三郎	(四三)○	大石喜一
佐藤文彌	○	佐藤文彌	(四四)○	大石喜一
黒田吉治	○	黒田吉治	(四五)○	大石喜一
加賀美豊三郎	○	加賀美豊三郎	(四五)○	大石喜一
野口善吾	○	野口善吾	(四六)○	武植川
松永吉次	○	松永吉次	(四七)×	井杉武
永野良造	○	永野良造	(四六)○	植松川
濱田精藏	○	濱田精藏	(四七)×	井浦戸
渡邊萬次郎	○	渡邊萬次郎	(四五)○	内吉
服部清吉	○	服部清吉	(五三)×	松道義雄
永田精藏	○	永田精藏	(五四)○	吉田兵藏
浜田精藏	○	浜田精藏	(五四)○	吉田兵藏
柳重郎	○	柳重郎	(五五)○	小寺源吾
伊藤重郎	○	伊藤重郎	(五六)○	安部保平
高島一貫	○	高島一貫	(五三)×	安部保平
中尾三次	○	中尾三次	(五四)○	安部保平
盛田保三	○	盛田保三	(五二)○	安部保平
瀧田精藏	○	瀧田精藏	(五二)○	安部保平
八木保三	○	八木保三	(五三)×	安部保平

- 以下(講)は講道館、(高)は第一高等學校、(專)は東京専門學校、(警)は警視廳、(區名)は各警察署、無標は警
 (五六) ○ 林 文之助(麻布)
 (五六) ○ 吉 堀 誠一
 (五七) ○ 米原竹次郎(高)
 (五七) ○ 増岡 次郎
 (五八) × 横田 美松(淺草)
 (五八) × 本多 親宗
 (五九) ○ 山本武五郎(麻布)
 (五九) ○ 金澤冬三郎
 (六〇) ○ 河東濬太郎(講)
 (六〇) ○ 須田 卓二
 (六一) ○ 及川雄一郎(本郷)
 (六一) ○ 清水伊勢吉
- (六二) ○ 高野幸太郎(本郷)
 (六二) ○ 倉田敬三
 (六三) ○ 齋藤 一郎(專)
 (六三) ○ 田中信藏
 (六四) ○ 平田 知夫(高)
 (六四) ○ 佐野甚之助
 (六五) ○ 山田敏行(專)
 (六五) ○ 島津理左衛門
 (六六) ○ 石津彌之吉(下谷)
 (六六) ○ 大中圭介
 (七一) ○ 狩野時三郎(講)
 (七一) ○ 諸遊慎吉
 (七一) ○ 大野秋太郎(講)
 (七一) ○ 松鹿福太郎(麹町)
- (六七) ○ 居相民吉(麴町)
 (六七) ○ 三輪吉太郎(講)
 (六八) ○ 八谷謹(淺草)
 (六八) ○ 藤森祥太(講)
 (六九) × 金丸惇一(警)
 (六九) × 柴田一能

右試合の模様に就て記せば、(三二)平賀、麻生二君の取組、及び(三九)盛田、森本二君の試合は頗る輕妙にして、業の千變萬化する所惜に紫帶の値打があつた。其他(四九)高島君が剛力無雙の大兵中尾君を支へたると、平野君の見事なる巴投が觀衆の心を沸かしたる後、愈々(五六)より塾生對來賓勇士の試合が始まつた。近頃めつきり腕を上げたる吉堀君は、左の足拂功を奏して、どつとばかりに林君を倒し、勢に乗じて、御得意は御先き御免と言はねばかりに押へ込み、遂に二本を收めた。(五七)高等學校に其人ありと知られたる大剛力家米原君と我部の美丈夫増岡君、流石の米原君も裸絞

に身動きも出来ず、二本共参つた。(五八)本多君の左腰見事なりしが、横田君の押込には敵し難く、遂に引分。(五九)昨年以來山本君に取つて塾の道場はよくよく鬼門と見え、金澤君の體落と巴投に、又もや飽氣なき最後を遂げた。(六〇)須田君得意の左體落、今か〜と待ちたる甲斐もなく、河東君の拂腰に討死した。(六一)及川君臥業に出でんとせしが、清水君能く避けて、體落と巴投にて之を破つた。(六二)次の高野君も五體に力を込めて立上つたが、倉田君靜に之に對し、取組むよと見る間に、苦もなく横掛にて倒し、更に立つや否や、忽ち右足拂にて掬ひしは、見る者も張合なく感ぜられた程であつた。(六三)田中君初めの程は、兎角守勢にて危く見えしが、中頃より頗る勇氣加はり、得意の跳腰見事なる所を見せた。(六四)佐野君の膝車返し巧みであつたが、平田君の巴投と押込みに勝を譲つた。(六五)山田君は専門學校居指の業士、島津君中々に抵抗せしが、遂に腰投と大内刈に倒れた。(六六)互に暫し揉み合ひしが、大勢初めより定まれるが如く、大中君膝車にて一本を收めた。(六七)殆ど引分とならんとしたが、三輪君拂腰にて相手を葬つた。

(六八)より有段者の試合、轟君の跳腰に八谷君收れ、(六九)金丸君が數度の巴投に、柴田君餘程危く見えしが、君も然る者、左に避け右に逃れ、遂に引分となつた。(七〇)狩野君は講道館の専門家にして、之に對する諸遊君は、先年來肋膜を病みて轉地療養中なりしが、數日前漸く歸塾したばかりである。而も立ち上りさま狩野君を得意の背負投にて投げ飛ばし、狩野君こは油斷ならずと警戒して、漸く絞一本を得、最早引分とならんとする頃、諸遊君の病身疲れてか、跳腰に敵をして名を成さしめた。(七一)最後の試合、麴町署の大兵松鹿君中々に奮闘せしが、講道館の豪の者大野君の膝車に討死を遂ぐるに至つた。

(三) 月 次 勝 負

昨年以來部員の數頗るに増加せし爲め、月次勝負は無級者有級者各別に之を行ふことになつた。

六月十五日と十月六日に行はれた無級者月次勝負に奮闘したる面々の中には、佐藤文彌、小泉浩、秋山孝之輔、海江田平八郎、平賀恒次郎、上杉彌一郎、大塚莊亮、西原久、小野秀一等の諸氏の名がある、皆後年柔道部に於て活躍した人々である。又此の年入塾したる吉武吉雄氏も十月の勝負に加はり、小泉浩氏に勝ち、佐藤文彌氏と引分を取つてゐるのが記録に見える。

次に有級者の月次勝負は、六月二十日に本年の第一回が催された。取組數總て三十七、甲組も之に加はつてゐる。好取組多かりし中にも、甲組の服部清吉氏が四人を抜きしと、中村愛作氏が強勇増岡次郎氏を破りしと、倉田敬三氏が剛敵四人を投げしとは、當日の出色なるものであらう。其他向山、平野の對戦の如きは、共に幼年組の大將株なれば、其技最も輕妙にして急がず躁がず戦ふさま、多く見る能はざる好試合といふべきであつた。この日ペルリ教授の紹介にて五名の外國人來觀し、大和男兒の勇壯活潑なるに何れも舌を巻ける様子であつた。

又十一月十六日の有級者月次勝負を見るに、高島氏は小兵にも似ず、何時も乍ら勝負慣れたる働きは目覺しかつた。堀切氏對向山氏、一は長大にして一は短小、而も向山は有名なる不倒翁否不倒兒なり、堀切氏の心中察すべしと記録にあるは面白い。倉田氏は佐野氏に脆く、佐野氏は田中に脆かつた。田中氏と諸遊氏、諸遊初段は大事を取り過ぎて、二氏共得意の技を示さず引分に了つたのは物足りなかつた。

(四) 紅白優勝旗新調

紅白勝負は年々行はれるが、是迄勝者の名譽を表彰すべき優勝旗の設備がなかつた所、幸ひ近來の盛況に際して、機逸

すべからずとなし、有級者間の協議一決して之が新調の寄附金を募集することになり、部員は勿論他の體育部の有志者等も快く之に賛同せられ、十一月目出度其調製を見るに至つた。

旗は當時の三井呉服店の意匠であつて、堅二尺幅二尺三寸、紅白鹽瀬の地に黒く縁取り、中に塾章の双ペンと柔の字を金絲にて刺繡し、明晃々たる九尺の長槍を柄としたる、美にして威あるものである。これが今日でも勝負の時毎に道場に持出さるゝ紅白旗である。

(五) 幼年組の組織變更

幼年組は從來最下級を初級とし、最上級を五級となし、五階級に分ちたりしが、今回之に三級を加へて、全部を八階級に區別し、最上級を一級とし、最下級を八級に改め、中七級八級は之を幼稚舎に置き、六級以上を本塾に設けることゝした。故にこれ迄の初級は即ち六級に相當することになり、紫帶の使用も四級以上と改正された。

この幼年組は明治三十七年に至りて、紫組と改められ、級別更に増して一級より十級までとなり、紫帶の使用は五級よりとなつた。後四十年に至つて、再び幼年組と改稱されたのである。

(六) 秋季紅白勝負

新嘗の佳節、秋季大會なる紅白勝負が華やかに開かれた。總勢百名兩軍に分れて居並べば、道場の一方に今回新調の優勝旗初めて掲げられ、場内爲に一段の光彩を放つ。吾こそ新旗の下に最初の手柄を立てんものと、將士の面上に衝天の意

氣が溢れてゐる。

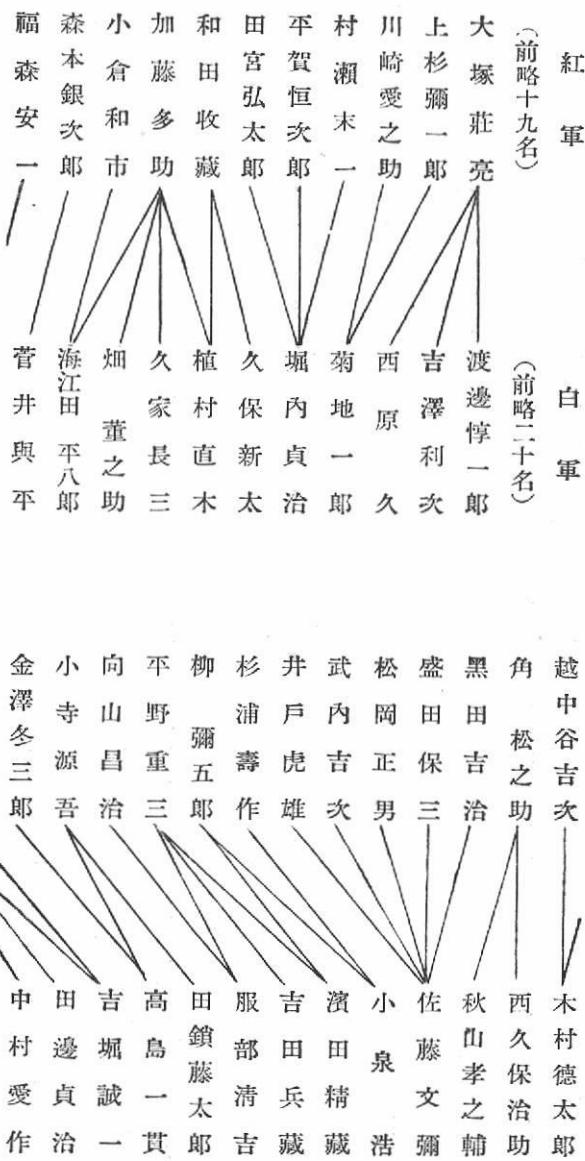
午前九時諸般の準備全く整ひければ、振鈴と共に先づ師範の挨拶あり、終つて兩軍の間に戦端が開かれた。紅軍に二人を倒す飯塚文吉氏あれば、白軍にも三人を投げ飛ばして四人目に引分けたる塙本太作氏あり、白軍の田村賢一氏紅軍に喰ひ込めば、紅軍にも藤平謙吉氏の如き若武者ありて、味方の頽勢を一舉に挽回す。斯く一進一退の裡に戦況展開して、左の取組がつゞく。

紅　軍

(前略十九名)

白　軍

(前略二十名)



須田卓二、大中圭介

倉田敬三、佐野甚之助

島津理左衛門、副將
田中信藏、大將
柴田一能、副將
諸遊慎吉、大將

當日の勝利は白軍に歸し、新調輝く優勝旗は大將諸遊慎吉氏の手に授けられた。尙この日福澤先生より部員に對して菓子を贈られたるは、一同の深く感謝に堪へざる所であつた。

(七) 雜記

中年寮生の紅白勝負

中年寮寄宿生の紅白勝負は、二月十八日に行はれた。總勢六十餘名、紅軍の大將乙組の黒田吉治、副將丙組の角松之助に對し、白軍にては乙組の盛田保三之が將となり、幼年三級の森本利三郎副として其陣營を固めた。交戦數刻、初め白軍は終始紅軍を壓迫してゐたが、紅重新進の業士角能く奮闘して頽勢を盛り返し、勢ひに乗じて白將の首級を上げしは、目覺しかつた。

幹事更迭

一昨年來幹事たりし柴田一能氏は、用務多端の故を以つて辭任せられたるに付、其の後任として佐野甚之助氏が推選せられた。

部員派遣

○四月二十八日第一高等學校柔道大會舉行せられ、我が部にも招待があつたので、倉田敬三、本多親宗の一二氏を派遣した

るが、當日本多氏は東京専門學校の三橋某と取組みて引分け、倉田氏は高等學校の勇將狩野氏と戰ひ、初め見事なる背負投にかゝり餘程危く見へしが、深く戒むる所ありて遂に之を倒し、名譽の賞牌を得た。

○五月二日明治義會の招きに應じ、本部より増岡次郎、吉堀誠一、向山昌治の三氏出席せしが、各自ベストを盡して其の任務を果した。

柔道講話

柔道の獎勵と之に關する智識を普及せんが爲め、十一月十七日講道館師範嘉納治五郎氏を迎へ、三田演説館に於て柔道講話會を催した。嘉納師範は講道館柔道の目的、研究上の心得、道德上に及ぼす効果等を諄々として説き去り説き來り、殆ど三時間の長講話を試みられた。説明に當りて山下師範を對手に投の形柔の形等を示し、猶山下師範と金澤氏の亂取を以つて其實地を解せしめ、聽衆一同に多大の感動を與へたるは興味ある催しであつた。

進級一括

○二月進級せる者左の如し。

幼年四級へ 森本利三郎、田鎖藤太郎

幼年五級へ 平野重三

四級へ 高島一貫、中尾三次、伊藤重郎、柳彌五郎

三級へ 田邊貞治、吉堀誠一

初段へ 諸遊慎吉

○七月の進級者左の如し

幼年四級へ 木村徳太郎

幼年五級へ 森本利三郎、田鎖藤太郎

四級へ 服部清吉、井戸虎雄、杉浦壽作、植松雅道

三級へ 小寺源吾

二級へ 増岡次郎、金澤冬三郎、中村愛作、清水伊勢吉、倉田敬三

一級へ 田中信藏、島津理左衛門

○又十一月頃進級の發表に依れば

四級へ 武内吉次、濱田精藏、小泉浩、佐藤文彌

三級へ 柳彌五郎、堀切善兵衛、吉田兵藏

五 明治三十四年史

(一) 寒 稽 古

一月十三日より開かれたる寒稽古皆勤者は、有級者十三名、無級者四十四名であつて、其稽古本數四百本以上のもの左の通りであつた。